インフォメーション

問い合せ：仙台市市民活動サポートセンター
TEL 022-212-3010／FAX 022-268-4042　Mail sendai@sapo-sen.jp

サポセンスタッフから

2月発行!
もやもや ぐるぐる ぎゅうぎゅう きょろきょろ うずうず しているときに読む本
―まちの今と未来をつくる活動者たちの実践から―

サポセンでは、これまでサポセンの講座やイベントに参加したり、相談に来てくださったりした方々の「その後」を取材してきました。活動をレベルアップさせていたり、新たな活動に一歩踏み出していたり、さまざまなストーリーを伺うことができました。今後「地域のために何か活動を始めてみたい」「地域の課題解決に向け、今の活動をもっと広げたい」との思いを持つ方々に向け、実践者の事例を1冊の冊子にまとめました。サポセン他、市内公共施設などで配布しています。
2019年5月から立ち上がった冊子編集チームのメンバーは、サポセンと河北新報社で実施してきた「市民ライター講座」の卒業生7人と地元クリエーターです。ぜひお手にとっていただき、活動の参考にしてください。（松村・水原）

＜掲載事例＞
- 田中琢夢さん
- 大人のための絵本よみやさん
- 本楽カフェ
- 佐藤柊さん
- 若年性乳がんサポートコミュニティ Pink Ring東北branch
- オレンジカフェ「鶴ケ谷」
- ピースフルヨガ仙台
- 子育てサポート楽っこ
- やかたおやじの会 パパンプキン
- 西公園プレーパークの会
- コカ・コーラ ボトラーズジャパン㈱
- 仙台市宮城野区中央市民センター
- 仙台駆け込み寺
- 認定向山こども園

他

サポセンスタッフから

サポセンをより良くするために。利用者アンケートにご協力お願いします!

1月14日（火）から3月16日（月）まで、利用者アンケートを実施します。
このアンケートは、より良い施設運営を行っていくために実施しています。アンケート用紙はサポセン窓口で配布し、1階窓口または5階交流サロンの回収箱で回収します。ぜひご協力をお願いいたします。（堀）

つながる つなげる サポセン

仙台市市民活動サポートセンターとは
様々な分野の市民活動、ボランティア活動の支援施設です。「自分たちのまちをもっと良くしたい」。そんな市民の自発的な活動を応援します。

ご相談ください
ボランティア活動をしたい／団体を立ち上げたい／組織運営の悩みを解決したい／他の団体や他のセクターと連携したい／自分のスキルを地域や社会に役立てたい…

今月の休館日 2月12日（水）、26日（水）

開館時間	月曜日～土曜日 9:00-22:00
	日曜日・祝日 9:00-18:00
休館日	毎月第2・第4水曜日（祝日の場合は翌日木曜日）年末年始

〒980-0811　仙台市青葉区一番町四丁目1-3
TEL 022-212-3010　FAX 022-268-4042
地下鉄南北線「広瀬通駅」西5番出口すぐ／地下鉄東西線「青葉通一番町駅」北1番出口から徒歩6分
［HP］https://www.sapo-sen.jp ［Blog］https://blog.canpan.info/fukkou/ ［Twitter］@SCSC4CA

仙台市市民活動サポートセンターは、特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンターが仙台市の指定管理者として、管理運営を行っています。［指定管理期間2015年4月1日～2020年3月31日］

市民ライターが、仙台の市民活動団体やワクワクビトを取材しています！
▶市民ライター
https://blog.canpan.info/fukkou/category_23/1

▶「ぱれっと」バックナンバーはホームページからダウンロードできます。
▶ぱれっとに関するご意見をお寄せください。

［ぱれっと 読者アンケート］サポセンホームページからアクセスいただくか、携帯電話等で2次元バーコードを読み取ってご利用ください。

発行	仙台市市民活動サポートセンター
発行日	2020年2月1日
編集	特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター
デザイン	PEACE Inc.
編集人	太田貴　菅野祥子　松村翔子　水原のぞみ　小田嶋くるみ　小林正夫
発行部数	3000部
配布場所	市内公共施設や行政窓口、市内一部店舗、市内外の支援施設

ぱれっと 2

仙台市市民活動サポートセンター通信 ぱれっと　2020 No.246

“ぱれっと”には、仙台市市民活動サポートセンター（サポセン）にいろいろな人が集まり、それぞれの色（個性）が発揮され、新しい出会いや活動が生まれていく。そんな願いがこめられています。

仙台をワクワクさせる人物をご紹介します

今月のワクワクビト

河原町マルシェ実行委員会 実行委員長
髙橋（たかはし） 理武（みちたけ）さん（38）

地域に暮らす自分たちが楽しみながら商店街を盛り上げる

仙台市若林区にある河原町商店街で2019年10月に第2回目の「河原町マルシェ」が開催されました。街を訪れた人は延べ2,600人。「普段の商店街では考えられない」と手応えを感じているのは、河原町マルシェ実行委員会実行委員長の髙橋理武さんです。老舗寿司店の後継ぎとして河原町で生まれ育った生粋の河原町っ子で、河原町商店街振興組合、地元サッカースポーツ少年団の代表兼監督と積極的に地域に関わっています。
髙橋さんは、商店街関係者の若手を中心に声をかけ、2018年11月に実行委員会を始動。マルシェ成功に向けて、メンバーの友人にデザインが得意な人がいると聞けば、チラシ作りを任せたり、印刷会社の知人にはポスター制作を依頼したり、商店街以外の人も巻き込んでいきました。「河原町に関わる人の中から新たにイベントを企画する人が出てくれたら嬉しい」。髙橋さんは、広がり続ける人と人の輪を、マルシェを訪れる人に楽しんでもらうことで還元します。

取材・文　市民ライター 阿部哲也

河原町マルシェ実行委員会
TEL（022）222-1757（河原町商店街振興組合内）
Instagram @kawaramachi_marche
河原町マルシェでは商店街で商いをする人たちが、野菜や水産加工物、ハンドメイドのアクセサリーの販売や、似顔絵屋をする等、自身の生業や特技を活かして盛り上げています。実行委員会は、若手メンバー13人が中心となり企画運営をしています。2019年8月に第1回目を開催。次回は、2020年4月頃に開催する予定。詳細はInstagramでご確認ください。

特集	つながりと役割のあるまちづくり Open Village ノキシタ
突撃レポート！	医療的ケアが必要な重度障がい児について理解を広めたい

特集

地域の課題を解決するために、様々な立場の人たちがコラボレーションする取り組みをご紹介します

つながりと役割があるまちづくり Open Villageノキシタ

仙台市北東部に位置する田子地区は、東日本大震災後、新しいコミュニティ作りに取り組んでいる地域です。企業とNPOが協働で運営する複合型施設では、地域の人が自由に使えるスペースを備えました。地域の人と施設を利用する様々な人が出会い、多世代が集う場づくりを紹介します。

Open Villageノキシタ

多様な人が居場所と役割を持って元気に暮らすまちにしたい

村長

株式会社AiNest（アイネスト）
代表取締役社長
加藤清也（かとう きよなり）さん

×

障がい者が社会とふれあいながら暮らす社会にしたい

社会福祉法人仙台はげみの会
サポートセンター Tagomaru
センター長
安藤明彦（あんどう あきひこ）さん

×

障がい者が働きながら地域の人と交流してほしい

NPO法人シャロームの会
ノキシタカフェ　オリーブの小路
副施設長
菊地仰（きくち こう）さん

×

地域の人が遊びに来てふれあう保育園にしたい

株式会社ペンギンエデュケーション
シャロームの杜ほいくえん
園長
加藤陽子（かとう ようこ）さん

「自分なりにできること」でつながりと役割がある場所

2019年5月仙台市宮城野区田子西にオープンした複合施設Open Villageノキシタ（以下、ノキシタ）には重度心身障がい者のためのグループホームや相談支援・介護支援を行う障がい者サポートセンター、地域共生を目指す保育園、障がい者が働くカフェ、地域の人が集まるコレクティブスペースがあります。コレクティブスペースにはキッチン、ミニ図書室、和室を備え、古民家の軒下のような大きな屋根のある土間があります。土間には「ノキシタを何かで飾りたい」と、住民が集めて来たまつぼっくりが積み上げられ、オーナメントを手作りする予定です。庭では植物が好きな人が植木や花壇の手入れをし、キッチンでは季節の料理を作って、にぎやかに会食をすることもあります。何かをしてもらうのではなく、それぞれができることを通じて、自然に自分の役割がうまれていくのがノキシタです。

村長の加藤清也さんは「毎日ノキシタに通って来る地域の高齢者は、障がい者や子どもたちと一緒に過ごします。その方は、これまで利用していた高齢者施設では支えられる立場でしたが、ノキシタでは人を支える役割を持ったことに喜びを感じ、心も体も元気になりました。また、障がい者や子どもは高齢者を元気にする役割を担ったのです」と手応えを話します。カフェを切り盛りするNPO法人シャロームの会の菊地仰さんは「障がい者が、聞き上手な地域の人に悩みを聞いてもらったりすることもあるようです」と見守ります。

地域との共生、多様な人や世代との関わりを大切に

加藤さんは、AiNestの親会社である国際航業（株）の技術者として田子地区のまちづくりに携わっていました。被災や新居購入などで移住してきた住民から「近所に知り合いがいないし、地域との交流も少ない」という悩みを聞いたことが複合施設を計画するきっかけになりました。「少子高齢社会で行財政が厳しくなる将来も事業を持続させるには、行政の補助金や助成金に過度に依存しない新しい仕組みづくりが必要であり、立場の異なる事業者が連携して取り組むことが重要」と考えました。また、地域の交流の場として使われた日本家屋の軒下のように、高齢者も若者も子どもも気軽に立ち寄って、様々な人が共存する場を目指しました。この思いに共感してくれる事業者を探す中で今の3者と出会い、現在に至りました。

社会福祉法人仙台はげみの会の安藤明彦さんは、「重度心身障がい者は限られた人たちの中で暮らしているので、地域の方と触れ合って過ごすことができるような環境をつくりたい」と語り、NPO法人シャロームの会は、障がい者の働き先として実社会に近い環境を求めていました。保育園を運営する株式会社ペンギンエデュケーションは、「地域社会の中で、色々な人とふれあう環境で保育を行いたい」と考えていました。それぞれが求めていた「交流」がノキシタで可能になったのです。

大家族のように集い、地域の居場所になる

加藤さんは「気付くと障がい者と子どもたちが一緒にくつろいだりしています。最初は子どもたちも障がい者を怖がって泣いたりしたのですが、だんだん慣れて触れ合うようになりました」と半年間の実感を込めて話します。加藤陽子さんは「様々な人に囲まれ大家族のような中で保育を行うことで、子どもたちが普段出会えない人に会う環境がつくれます。地域から関わる人がもっと増えて欲しい」と話します。交流から新たな活動が生まれる、生き生きとした居場所「ノキシタ」の挑戦は続きます。（取材・文　鈴木　美紀）

- Open Village ノキシタ（株式会社 AiNest）
  〒983-0026　宮城野区田子西 1-12-4　TEL 022-352-3022
- ノキシタカフェ　オリーブの小路　TEL 022-385-7931
- シャロームの杜ほいくえん　TEL 022-357-0920
- サポートセンター Tagomaru　TEL　022-352-5951

活動に役立つ書籍をご紹介します

お役立ち本

「国際協力」をやってみませんか？ 仕事として、ボランティアで、普段の生活でも

著者：山本敏晴　発行所：株式会社小学館

経験豊富な活動家が、国際協力の世界の全貌を伝えるために著した一冊です。初心者を相手に1対1で説明する会話形式を取りながら、国際協力についての知識や活動の現場の状況を、5W1H（いつ、だれが、どこで、何を、どのように、なぜ）の順番で章を分けてわかりやすく解説。活動を始めていく方法も紹介しています。国際協力に興味を持っている方に、ぜひお読みいただきたい入門書です。

活動を始める一歩を応援します

コトハジメ

ボランティア募集！『杜の子まつりin仙台』

NPO法人せんだい杜の子ども劇場は、子どもや大人の感性に働きかける様々な事業を通じて、子どもの健やかな成長を支援しています。今回はイベント運営のボランティアを募集中。内容は、おもちゃのリユース遊び「かえっこバザール」、工作やワークショップ、舞台鑑賞などのお手伝いです。

●活動日時：2月24日（月・祝日）ボランティア時間帯9:00～19:00
●活動場所：日立システムズホール仙台
●昼食・交通費（1000円）支給 ●申込締切：定員になり次第終了
＜問い合せ・申込み＞　NPO法人せんだい杜の子ども劇場
TEL / FAX 022-375-3548　mail office@senmori.org

サポセンスタッフ 水原のぞみの突撃レポート！

取材団体名 / 重度障がい児（者）を支援する会ファーシル

医療的ケアが必要な重度障がい児について理解を広めたい

連絡先
代表 工藤純子さん
TEL 090-4045-3025（工藤）
Mail facil.sendai@gmail.com

◀講座で、体に負担をかけない車いすの持ち上げ方を教わる様子

重度障がい児（者）を支援する会ファーシルの代表を務める工藤純子さんは、自身も重度障がい児の親です。2019年4月に団体設立以降、毎月、重度障がい児の現状を知ってもらいたいと勉強会や交流会を行っています。勉強会では、車いすの操作の仕方や障がいの状態に合わせた工夫などを学び交流会では、芋煮会を開いて、重度障がいのことを知る機会にしています。現在、仙台市内を拠点に、5人のメンバーで活動中です。

工藤さんの子どもは、内臓に障がいがあり、胃にチューブを通し直接栄養を流し込む“胃ろう”という医療的ケアが必要です。手は自由に動きますが、知的障がいがあるため注意しても理解できず、チューブを自分で外してしまう危険があります。外出時に栄養補給する場所に困ったり、大きな声を出してしまったりするため、「重度障がい児と一緒に気軽に立ち寄れたり、買い物中だけでも預かってもらえる場所があれば」と切実な願いがありました。「常に見守りが必要なうちの子は、高校卒業後の預かり先の施設がなかなか見つからない」と焦りも感じていました。

今後つくりたいのは、医療的ケアを含めた見守りを行う居場所です。これまでの交流会で出会えた支援者や周囲の協力を得て、工藤さんは今、自ら一歩を踏み出したところです。